

“農と食” 北の大地から

連載第46回

消費者が直接支える農業
(その2. CSAの可能性)

ルポライター
滝川 康治



農家と消費者が 産直活動で「小 ともにも支え合い さな農業」を実現

国内外からやってきた老若男女がテーブルを囲み、自家産の野菜などを使った料理を楽しむ「モノビレッジ長沼」の昼食シーン(写真右)。大規模農業に疑問を感じ、アメリカから移り住んでCSAの活動に取り組むエブ・レイモンドさん(荒谷明子さん夫妻(写真左))

食卓。午前中の作業を終え、十数人の老若男女が集まりにぎやかだ。まるで一つの家族のような雰囲気である。

農家と消費者が提携して農産物を直接受け渡す

「モノビレッジ長沼」は九五年、札幌メノナイトキリスト教会(プロテスタント系)の有志によって、農業を中心にした共同体をめざして誕生した。

この農場の大きな柱は、同じ地域内に住む農家と非農家が提携して有機農産物

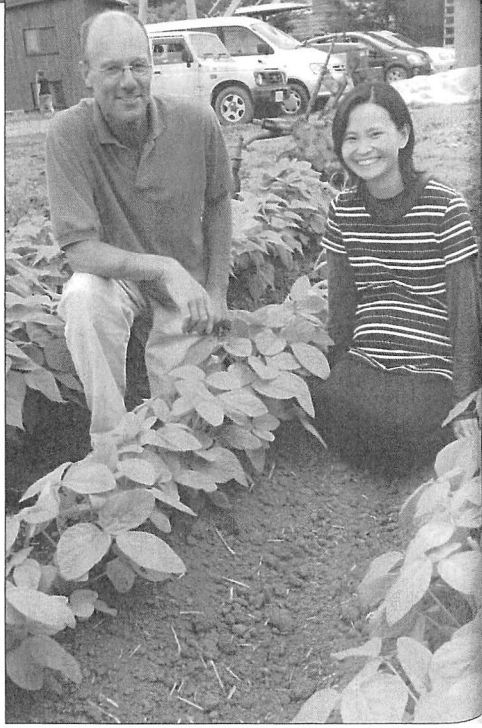
を直接受け渡す、CSAの活動である。一般の人には耳慣れないCSAとは、「かかりつけの医者や美容師がいるように、会員が共同で、かかりつけの農家に持つようなもの(農場の案内より)」と例えられる。日本の産直をモデルにして、八〇年代半ばからアメリカで発展してきた産直システムだ。

九四年に結婚したレイモンド・荒谷さん夫妻は、アメリカ中南部の穀倉地帯で二十三軒の消費者とともにCSAをやっていた。そこに舞い込んだのが北海道の農場づくりの話。大規模農業に疑問を

感じていた二人は、新規就農者を積極的に迎え入れようとする長沼の人たちの熱意に心を動かされ、ここに移り住んだ。「夫のレイが畑に行くと、「米のことはあの人に聞け」ジャガイモは……と、地域の人たちがサポートチームになつてくれて、心強かった」(荒谷さん)

「ここには農業の先生がいますよ」(レイモンドさん)

と、周囲の協力にも恵まれた。経営形態は有限会社。販売高の四割をCSAで占めており、残りはカボチャや米などの通信販売、直売所や八百屋などへの販売に充てる。田植えから稲刈りまで体験できる「みんなの田んぼ」や、ジャガイモの収穫、ハロウィンのカボチャ彫りなどの交流活動も盛んだ。



国内外から訪れる人の つながりが農場の支えに

メンバーの金子献一さん(ヘザーさん)家は昨年春、三人の子に日本の文化や言葉教えるために、アメリカ中部のミズーリ州からやってきた。

「野菜づくりをして、兼業してでも小さな農家をやりたい。鶏や山羊も飼いたい。レストランに出荷する東洋野菜を作

共同農場を切り盛りする

空知管内長沼町の馬追山の麓、林に囲まれた「モノビレッジ長沼」は、CSA (Community Supported Agriculture) の略。地域を支える農業と呼ばれる産直方式を日本でいち早く導入した農場である。五ヘクタールの農地で四十種類ほどの野菜や米、豆類、麦類を作り、平飼いの鶏も五百羽ほどいる。

陰をつくって雑草を抑える。もみ殻は薫炭にして、鶏糞や森の土と混ぜ合わせて堆肥にする。雪を入れた半地下の室で根菜類などを保管する。伝統的な農法に学びながら創意工夫を重ねてきた。

農場運営の中心になっているのは、アメリカでCSAの活動に取り組んだ経験がある、エブ・レイモンドさん(1960年、米国ネブラスカ州生まれ・荒谷明子さん(69年、札幌市生まれ)夫妻。住み込みや近隣の町から通うメンバーと研修生、荒谷さんの両親、CSAの会員らと一緒にさまざまな作業を分担しながら、この共同農場を切り盛りする。

レイモンド・荒谷さん夫妻から話を聴くうちに昼食の時間になった。農場産の旬の野菜を使ったサラダやご飯、カボチャのスープ、カレー……と盛りだくさんな



「農業の恵みだけでなく、リスクも分かち合いたい」と話す橋本順子さん

「百姓は家族の食べるものを作り、余ったものを市場に持って行く——と僕は習った。でも、実際には二、三種の作物を出荷し、余ったおカネで家族の食べるもの

「モノビレッジ長沼」での研修経験もある伊達寛記さん(69年、栗山町生まれ・愛子さん(70年、室蘭市生まれ)夫妻は今春新規就農の夢を実現した。

「野菜セット」の会員は、伊達さんの子どもたちが通う札幌トモエ幼稚園(木村仁園長)の関係者が大部分を占める。親と教員が助け合い子どもを自然の中で伸び伸び育てる同園とは、モノビレッジ時代からの付き合い。培った信頼関係が契約栽培の原動力になっているようだ。

「安全・安心な食べもの」を求める人が増え、有機農産物に対する需要も増えている。が、それが北海道農業のあり方を大きく変えるまでには至っていない。

「安全・安心な食べもの」を求める人が増え、有機農産物に対する需要も増えている。が、それが北海道農業のあり方を大きく変えるまでには至っていない。

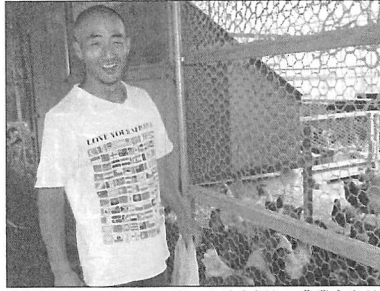
「これは、農場から採れた草を腐熟させて鋤き込むだけで育てる、より本来の農法なんです。(慣行栽培や有機農法に比べて)ハードルは高いけれど、最初からきっちりと割り切った。僕らの農業の意義を見いだしてくる人たちが野菜を買ってくれます(伊達さん)

「互いに支え合う農業」「ハートが伝わる関係」「家族と家族のつながり」「農業と自然を体感」——この四つが伊達さん一家がめざす農場の姿である。



カボチャの脇に燕麦やライ麦を栽培し、土づくりと風除けに成果を上げている。韓国の伝統農法に学び考えたものだ

「ここは、何家族かで農業をやっている感じで、居心地がいいんです。子どもの休みの日は農場に連れてこられるし、すっかりはまってしまいましたね」と笑う鈴木さん。来年には東京に戻って東洋医学を学ぶ。いずれ畑付きの癒しの場所を創ることが目標という。



「来春にはアメリカに戻り、土地を探して農業をやりたい」と話す金子献二さん

「(野菜日より)によって「なぜCSAをやっているのか?」と思いついてもう役割を果たしています。野菜の種類や量などに不満も出てくるけれど、自分たちの声を伝えられる。農業の良さを知ることができるといふ会員の声もありますね(担当の荒谷さん)

「一番楽しいのは都会にない自然。モノビレッジの仕事はきつけれど、空気がいいし、まわりの景色が心を和ませてくれますね」と話す橋本さん。安易にスーパーで野菜を買わないようにして、農場の作物が育つのを待つ。地産地消にこだわりながらCSAの活動に取り組み。

と、小さな農業へ意欲をのぞかせる。毎日のように通ってきて二年目になる鈴木さん(67年、上川町生まれ)は、鶏の世話やトラクター作業、野菜づくりなど、なんでもこなす。東京で暮らしていたが、道東を旅していた夫がこの農場のことを知ったのが縁で、家族ぐるみで栗山町へ移り住んだ。

CSAの会員は「モノビレッジ」と呼ばれる。本年度は札幌や北広島、江別、長沼から五十五世帯が会員になった。年代の高い人と若い層の両方が多いという。運営費用を公開し、年会費(5,990円)を公開して公開して会費を決める産直のシステム

「(野菜日より)によって「なぜCSAをやっているのか?」と思いついてもう役割を果たしています。野菜の種類や量などに不満も出てくるけれど、自分たちの声を伝えられる。農業の良さを知ることができるといふ会員の声もありますね(担当の荒谷さん)

「自分の健康のことだけでなく、広い考え方を持つようになった人が多い。」「こういう農業を育てたい」「自分たちが食べたいと北海道の農業は守れない」という意識になってきていますね



「ファーム伊達家」では在来種の自家採種にもこだわる。ハーブの一種・ルッコラも花を咲かせて種子を採る

「いい野菜を食べると健康になれる。そして地球も元気になる——そんな野菜を取りたい」と思っていたんです。伊達さんの野菜は園ごたえが違う。子どもがルッコラを食べても、おいしい苦さがあります。(一緒に届く)お便りを読むと、心をこめて仕事をしていることが伝わってくるのがうれしいですね」

笑顔でこう話すのは山田恵さん(72年生まれ)。菜食主義で三人家族、自然農法の野菜を待ちわびていた。Bセットを三日ほどで食べてしまっ、という。

一年前に大阪から移り住んだ南谷由紀さん(70年生まれ)は野菜の質には無頓着だったが、トモエ幼稚園では食にこだわる人が多く、見方が変わった。

「水っぽくないトマトは初めて食べたし、大根の葉を捨てることもなくなりました。ハウスで子どもに苗つくりを見せたので、

「これが、あの野菜なんだよ」と話しながら食べるのが何ものにも代えがたいですね。ターサイやルッコラなど初めての野菜は料理の本を見たり…。お母さん同士のレシピ交換にもつながっています」

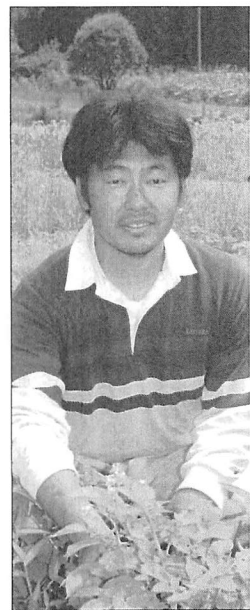
と野菜セットの到着を心待ちにする。「GM作物や品種改良など企業に都合のいいものが作られ、アレルギーの出る子が当たり前になっている」と危機感を抱くのは、メノブレッジの会員だった伊藤ルミさん(70年生まれ)。そんななか、在来種の野菜を食べられる幸せを感じつつ、「子どもが卒園しても、伊達さんの野菜とはずつと付き合う。自然にそうなると思えます」と心に決めていた。

ほかの母親たちも「野菜の味が濃い」「伊達さんの話をする、子どもがすくく食べてくれる」と口をそろえる。

みんなが支え合う社会を創り、CSAを伸ばそう

一緒に話を聞いていた伊達さんも、「ここは同世代の人が多し、知人に口にしてもらえる喜びもある。どんなところで食べているのか分かる心がこもりますね」とうれしそう。身近な「食の応援団」を得たことは、ファーム伊達家の何よりの財産なのだろう。

モデルは日本にありながら、この国で



遊休農地を借りて自然農法による野菜づくりを手がける伊達寛記さん。公務員から転身し、「小さな家族農業」をめざす

CSAに取りくむ人はそう多くない。草分けのレイモンドさんは、農業や経済のあり方について、こう力説する。

「CSAのようなやり方が増えず、WTOや農産物の自由化で農業を突き動かそうとすれば、日本の農業はなくなってしまう。世界規模の農業は石油が安いことが前提になつていて、それをずつと続けるために戦争が行なわれている。CSAのような農業が伸びるには、そうした生き方ではなく、みんなが支え合う社会を選択しなければなりません。CSAは非暴力の運動、とわたしは考えています」

「農業の恵みだけでなく、リスクを分かち合う会員や団体が増えることが夢」と話すのは橋本順子さん。多くの消費者の意識が「安全なものほしい」にどまっていることに園がゆきを感じつつ、

「どこまでも地産地消にこだわり、日本の農業のありようも見通して取りくみたい。野菜を受け取るだけでなく、どんな畑に行きましよう」と呼びかける。

わたしが印象深かったのは、子育て世代の人たちのなかに、農業と消費者との

つながりや、食のあり方に対する問題意識を持つ人が増えている、ということだ。「幼児期の子どもたちが野菜の味わい深さを分かってくれたら、味覚を育てる面でもいい。僕らの子どもたちの時代になったときに楽しみ(伊達寛記さん)という言葉が頼もしい。その受け皿として、CSAや契約・提携栽培、小麦や大豆のトラストなど「食べる側」が直接農業を支える活動に明日への希望が持てる。

規模拡大とモノカルチャー路線をひた走り、小さな農業をないがしろにしてきた北海道農業。そのツケが農産物価格の低迷や生乳の減産などの形で現れているいま、CSAの活動はわたしたちに多くの示唆を与えてくれる。

■メノブレッジ長沼
長沼町東6線北13号
☎011-23-809-2300

URL www.warp10hotan.jp/naam
011/

■ファーム伊達家
札幌市南区北の沢4丁目1-16
☎011-572-3866